

## 高齢者居住施設における囲炉裏の導入が入居者の生活展開へ与える影響に関する研究(その2)

### - 入居者の行動観察から考察する囲炉裏の有効性 -

正会員 山田雅之\*1 同 山本恭史\*4  
同 三浦研\*2 同 山口健太郎\*5  
同 辻原万規彦\*3 同 外山義\*6

高齢者居住施設 痴呆性高齢者 生活展開 行動観察 囲炉裏

#### はじめに

前稿では、冬期の暖房として囲炉裏を導入することが室内の温熱環境に及ぼす効果を計測、分析を行った。本稿では、囲炉裏の導入が入居者の生活展開に及ぼす影響を考察する。

#### 調査概要

調査対象施設は1998年9月、兵庫県A市に開設された小規模高齢者居住施設GH(図1)において行った。調査は2000年の11月下旬、12月上旬の2回、各2日間ずつ行った。なお囲炉裏は1回目の調査後に導入した。入居者の属性は表1の通りである。但し、入居者A.Fは第1回調査時に入院していたために、調査対象者から除いた。調査方法としては、入居者の追跡行動調査を行い、入居者の生活時間帯である午前6時から午後8時までの13時間、入居者の自室、トイレ、浴室を除く施設内の共用空間における全行動を観察記録した。囲炉裏の配置場所については、調査対象施設における共用リビングの利用が西リビング主体となっていることを考慮して配置した(註1)。

#### 囲炉裏に関する行為の内容と行為の自発性

囲炉裏に関わる全ての行為を取り出し、「囲炉裏に関する行為分類」を行った(表2)。その結果を図2に示し、さらに、これらの行為をスタッフによる誘導によって起こる行為と入居者が囲炉裏に自発的に関わることで起こる行為(註2)に分類した結果を図3に示す。図2より、採暖に関する行為の割合が23%であるのに比べ、調理に関する行為が65%とはるかに高い割合を示している。また少ないながらも視覚に

関する行為、入居者の親族や知人を囲炉裏を囲んでもてなすといった行為などが見られた。さらに図3より囲炉裏に関わる行為の85%が入居者により自発的に行われていることが確認できる。以上の結果から、囲炉裏に関わる行為が囲炉裏を暖房装置として利用するだけではなく、調理や食に関する行為や囲炉裏の火をみつめてゆっくりするといった行為などを促す装置としても機能し、さらに囲炉裏の導入からわずか1週間しか経っていないことを考慮に入れれば、今後より自発的な行為が増加するものと考えられる。

#### 囲炉裏に関わるときの姿勢

囲炉裏に関わるときの入居者の姿勢を調査した結果を図4に示す。座位状態で関わる行為が66%と一番高く、次いで立位状態で関わる行為が27%、最後に歩行状態で関わる行為が7%であった。これより、囲炉裏のもつ温熱効果は局所的なものであったが、入居者に与える影響は決して局所的ではなく、室全体にまで及んでいることが言える。

#### 囲炉裏の導入と会話の多様化の関係

囲炉裏の関与が西リビングで交わされる会話に及ぼす影響について調査した結果を図5に示す。東リビングはほとんど利用されておらず、生活の主体となっている西リビングでの会話に限定した。会話は日常会話と介助に関する会話に分け、GHで食事に関して入居者の自主性が重んじられていることを考慮に入れて、それらの会話をさらに食に

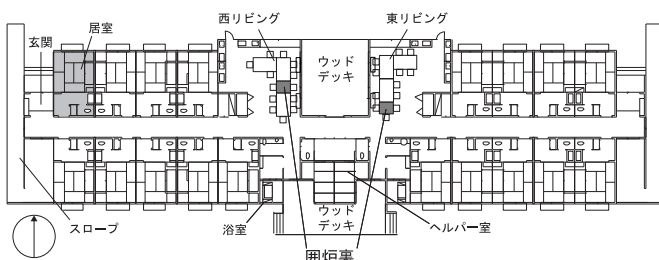


図1 グループハウスのプラン

表1 入居者の属性

名前	O.H	M.Y	A.F	T.K	T.J	K.H	U.S	Y.T	Y.A	T.H
性別	女	女	女	女	女	女	女	女	女	男
年齢	92	82	78	76	83	79	86	82	81	68
自立度	J1	J1	J2	J2	J2	J2	A1	A2	A2	J2
要介護度	1	1	1	2	2	要支援	3	3	3	2
痴呆度				a	a					

(自立度、痴呆度はともに厚生省による痴呆程度と自立度(ADL)の判定基準を用いた。年齢は2000年12月時点、要介護度は2000年11月時点を参考にした。)

表2 囲炉裏に関する行為分類表

分類	囲炉裏の火で暖を取る	具体例
採暖	囲炉裏の火で暖を取る	手をかざす 手を暖める
視覚	囲炉裏の視覚効果に関する行動	火をみつめる
管理	囲炉裏の火元の管理行動	灰をならす 火加減を調節する
食	囲炉裏での調理に関する行動	調理したものを食べる 囲炉裏の火にやかんをかける やかんからお茶を汲む
その他	その他の行動	囲炉裏の火でもてなす

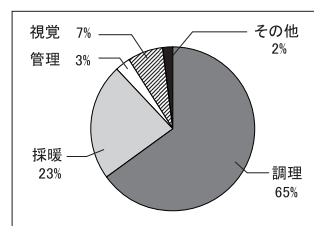


図2 囲炉裏に関する行為分類

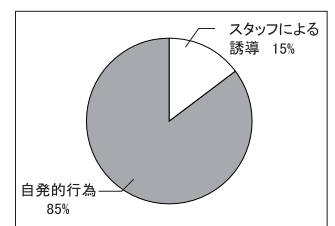


図3 囲炉裏に関する行為の自発性

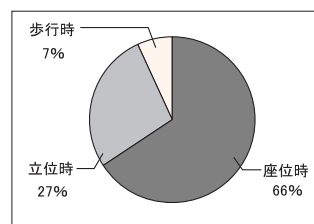


図4 囲炉裏に関わるときの姿勢

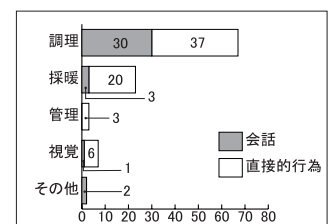


図5 直接的行為数と会話数

連した会話とそれ以外の会話に分けた合計4つに分類した。図9は横軸に10分間隔の時間軸、縦軸上方に会話の頻度数、縦軸下方に西リビングに現れた入居者の人数をとっている。4日間を通して、会話総数の頻度に関しては、ほとんど差がなく全般的に日常会話が多く交わされ、毎食時及び間食時に西リビングに入居者が集まり、会話が増えていることが確認できる。ここで囲炉裏に関する行為が会話を伴うかどうかにかかわらず、調理に関する行為は、他の囲炉裏に関する行為に比べて会話を伴う行為が多いことが確認できる。よって食に関する会話を日常会話、介助に関する会話、囲炉裏に関する会話に分類して分析した(図7)。囲炉裏に関する会話が食事時間帯に多く連続的にかわされていることが確認できる。これより、囲炉裏は採暖といった静的な利用にとどまらず、調理や食事などと関連することで、豊かな会話を生みきっかけとなり、1日の生活リズムを作り出していることがわかる。

### 囲炉裏導入が痴呆性高齢者に与える影響

囲炉裏に関わった頻度数を図8に示した。高い頻度で痴呆性高齢者である2人が関わっていることが確認できる。最も囲炉裏に関わる頻度が高かった痴呆性高齢者T.Kの生活を具体的に見ながら、その中から囲炉裏に関わる行動を抽出して囲炉裏との関係を考察していく。図9は、T.Kの1日における13時間(7時-20時)を10分ごとの行為を時間断面で抽出して作成したものである。ただし囲炉裏に関わった行為がその後の生活展開に与える影響について深く考察するために囲炉裏に関する行動については10分間の間に起こった頻度数で表している。リビングでテレビを見る行為が日常的な静的余暇活動の大部分を占め、導入前後においてこの傾向に変化は見られないが、導入後においては、朝食をとりながら、囲炉裏にある五徳にかけたやかんからお茶を汲むといった囲炉裏に関わっている行為が確認され、それとともに徘徊の頻度が減少している。

### 結論

(1)入居者が囲炉裏に関わる時に起こる行為が暖を取る行為に限らず多様であり、それらの行為の大部分は入居者によって自発的になされる。またそれらの行為は着席時だけに起こるのではなく、立位時や歩行時の状態でも起こり得る。すなわち囲炉裏の影響は入居者の目の届く範囲にまで

及んでいると言える。

(2)囲炉裏と食が密接に関連することにより、食事時間帯の会話が多様化する。

(3) 囲炉裏に関わる入居者の中でも痴呆性高齢者に与える影響が大きく、囲炉裏が痴呆性高齢者にとってある程度落ち着きを取り戻させる可能性を示唆している。

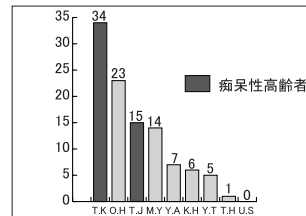


図8 囲炉裏に関わった頻度数

註釈

- 1)調査を行った4日間で、東リビングには時間平均で入居者0.3人が滞在していた。東リビングの利用は一部の入居者がマッサージをするときの利用に限られている。
- 2)スタッフと入居者の関係が成立することによって起こる行為をすべてスタッフによる誘導によって起こる行為としている。

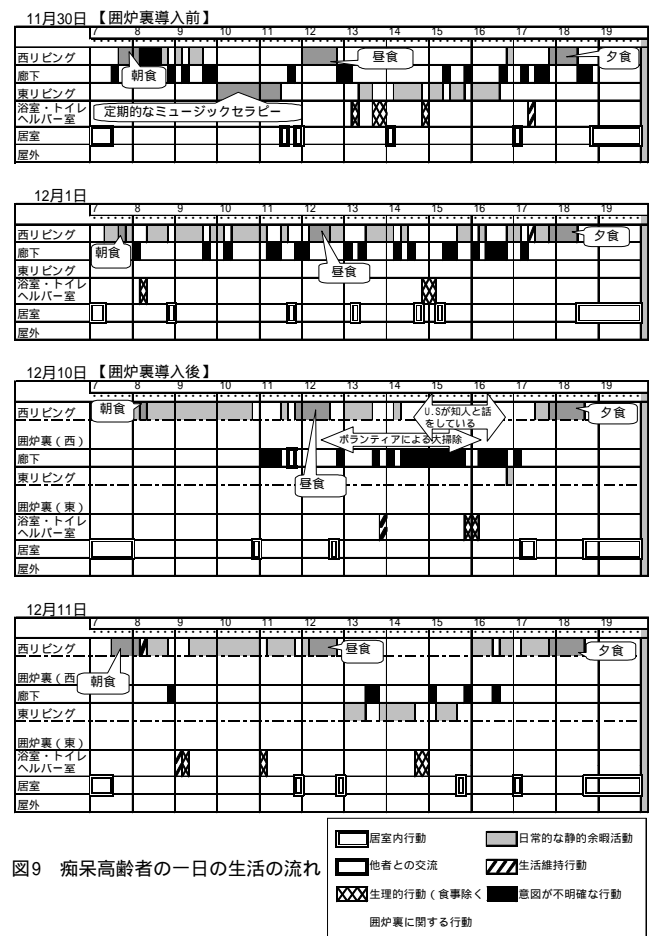


図9 痴呆高齢者の一日の生活の流れ

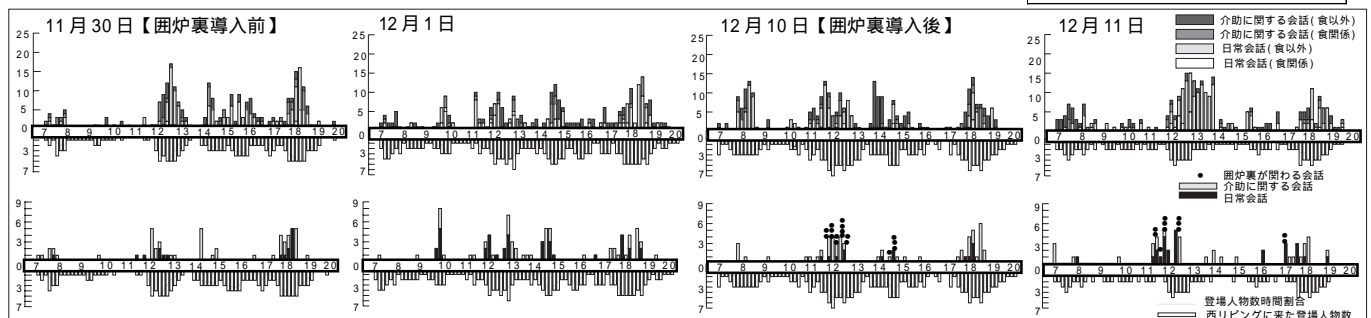


図5 1日の会話頻度数(上段4つ)、図7 1日の食に関する会話頻度数と囲炉裏に関わる会話頻度数(下段4つ)

\*1 京都大学大学院工学研究科 修士課程  
\*2 京都大学大学院工学研究科 助手  
\*3 熊本県立大学 講師

Graduate Student, Kyoto Univ.  
Assistant, Kyoto Univ. Dr. Eng  
Lecturer, Prefectural Univ. of Kumamoto Dr. Eng

\*4 京都大学大学院工学研究科 修士課程  
\*5 京都大学大学院工学研究科 修士課程  
\*6 京都大学大学院工学研究科 教授

Graduate Student, Kyoto Univ.  
Graduate Student, Kyoto Univ.  
Prof. Kyoto Univ. Ph.D